
ハッピーライフ

エルルゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピーライフ

【Nコード】

N2134F

【作者名】

エルルウ

【あらすじ】

とある普通の高校生、清水晴斗はとある事情により幼なじみの柊瑞希と暮らすことになった。

初恋（前書き）

多少エロくなるかも知れませんが
頑張ります

初恋

俺の名前は、清水晴斗

高校二年生、数年前に、両親が他界して、少し前までは一人暮らしだったのだが今は幼なじみの柊瑞希と暮らしている。

瑞希と暮らすことになった理由は瑞希の親の急な出張で一年間ぐらい帰って来れないというもので今は、一緒に暮らしている。

「晴斗くん朝ですよ、早く起きてください。」

「ん、うつ…ん、瑞希か？」

もう、朝か…と思いながら目を開いた。

「おはようございます。晴斗さん、早く着替えて、下に降りて来てください」と言って瑞希は部屋を出ていった。

俺は瑞希が部屋を出て行くのをぼんやりと見た後着替えを始めた。

そして、着替えが終わり部屋を出て一階の居間に向かった。

一階に降りると、瑞希は朝食の準備を終えて椅子に座るところだった。

「おはよう瑞希、今日も早いな！」

すると、瑞希は苦笑いをしながら

「おはようございます晴斗くん、でも私が早いんじゃないって、晴斗くんが遅いだけでよー！」

「そうかな？、別に普通だと思うけどな」

まあいいや、とりあえず朝飯食おうぜ」

はい、と言って明るく笑った瑞希と朝食を食べ始めた。

食事の途中に、

「そういえば、うちの学校明後日テストですが晴斗くんちゃんと勉強してますか？」

テスト？…と声のトーンを下げて答えた。

「あの、晴斗くん…まさかとは思うんですけど、知らなかったんですか？」

「うん、テストがあるなんて聞いてないんですけど…僕はどうしたらいいんですか？」「またも、瑞希は苦笑いを浮かべながら」
「とりあえず、部屋に戻って勉強したほうがいいんじゃないですか」

その言葉を聞いて俺は自分の部屋に戻っていった。部屋に戻ってさあて、何からやるかと独り言を言いつつ、机を見て最初に見えた数学の教科書を広げて勉強を始めた。

勉強を始めて数時間がたった頃だった。
不意に

「晴斗くん、お昼ご飯を作ったんで持ってきました〜！」
と瑞希が入ってきた。

「あれ、もうそんな時間だっけ？」

瑞希は、明るくはいと答えて持ってきた物を小さいテーブルの上に置いた。

俺は、はああと大きなあくびが出た。

すると、瑞希は不意に俺の顔の真横から顔を出し勉強中のノートを覗き込んできた。

俺は驚いて下を向いた。顔が赤くなっていくのが自分でも分かった。そう、俺は瑞希に恋をしている。

すると、ノートを見ていた瑞希が不意にこっちに顔を向けて

ここ間違ってますよ！と言ってきた。

俺は焦りながら、は、はい、と曖昧な返事をしてしまった。

「どうしたんですか？」

顔が赤いですよ？」

「いや、何でもないよ、何でも、それよりも昼ご飯を持ってきてくれたんだろ、じゃあ 昼飯食うわ」

焦りながら答え小さいテーブルの横に座った。
すると、

「わ、わたしもここでお昼ご飯食べていいですか？」

「い、いいけど テーブル小さいけどいいのか？」

瑞希は、嬉しそうに笑みをうかべて、はい、と答えて向かい合うように座った。

俺は顔が赤くなりながらも、もくもくと昼ご飯をたべた。

昼ご飯を食べ終わって瑞希は、食器を片付けてきますと言って部屋を出ていった。

俺も勉強を再開した。

それから、また数時間が経った。

でも、勉強が頭に入らない。

それに、さっきから瑞希のことが頭から離れない。

少しでも間が開くたびに瑞希の笑顔を思い出してしまう。

くそ、ちょっと頭冷やしに散歩でもいুকかと小声で言って部屋に置き手紙を置いて家を出た。

家を出ると、辺りはすっかり茜色に染まっており、太陽が沈みかけていた。

「さあてと、川原でもいুকかな」と言いながら 川原に向かって歩き出した。

歩くこと十五分ほどで川原に到着した。

到着した時には太陽も沈んでいて辺りも暗くなり始めていた。

川原では、特にやることもなかったから仰向けになって星を見ていた。

何時間そうしていただろうか

だけど、川原に来て仰向けになってからも考えるのは瑞希のことばかりだった。

ざっざっざつと誰かが近づいて来る足音が聞こえる。

足音はどんどん近づいて来て俺の近くで止まった。

「もっ晴斗くん、こんな所に居たんですか」

それは、瑞希だった。

「み、瑞希？あれ、なんでここに？」

「だって夕飯の支度が出来ても帰って来ないから心配になって…」

瑞希は少し焦ったように言った。

ぷ、ははは、と俺は笑っていた。

「な、何も笑わなくても」

瑞希の顔がみるみる赤くなる

「ご、ごめん、あんまりおかしかったからさ！

でも、ありがとう」「瑞希は顔を赤らめながらも、どういたしまして、と言った。

それを見て俺は頭の中がクリアになって、自然とその言葉を口にしていった。

「瑞希、俺 瑞希のこと好だ」

「え」

.....

少しの沈黙の後

瑞希が口をひらいた

瑞希は、不安そうに俺の顔を見て

「わ、私なんかでいいんですか？」

「瑞希じゃないとダメなんだ！」

瑞希は少し考えた後恥ずかしそうに

「私も晴斗くんのがずっと前から好きでした」

と言って俺の前に来て自分の唇と俺の唇を重ねてキスをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2134f/>

ハッピーライフ

2010年11月16日03時10分発行